

條風会十周年

平成二十六年

九月十三日(土)

午後十二時半始(開場十一時半)

十四世喜多六平太記念能楽堂

# 條風會

喜多流能楽

Jo-fu-kai

時をかさね  
あらたに  
たち起くる風

能 三井寺

狩野 了一

狂言 栗 焼

山本 泰太郎

能 実 朝

内田 成信

次回予告

平成 27 年 2 月 21 日 (土)

能 賀茂物狂 狩野 了一

能 邯鄲 金子 敬一郎

次回予告

平成 27 年 9 月 12 日 (土)

能 松風 友枝 雄人

能 殺生石 女体 内田 成信

チケットのお申し込みは

- ◆ 一般 6,000 円 (前売り 5,000 円)
- ◆ 学生 4,000 円 (前売り 3,000 円)
- ◆ 座席指定券 ————— 2,000 円

お申込み・お問合せ先

喜多能楽堂 Tel ——— 03(3491)8813

狩野 了一 Tel Fax 03(3301)9788

友枝 雄人 Tel Fax 03(5950)4543

内田 成信 Tel Fax 03(3721)3311

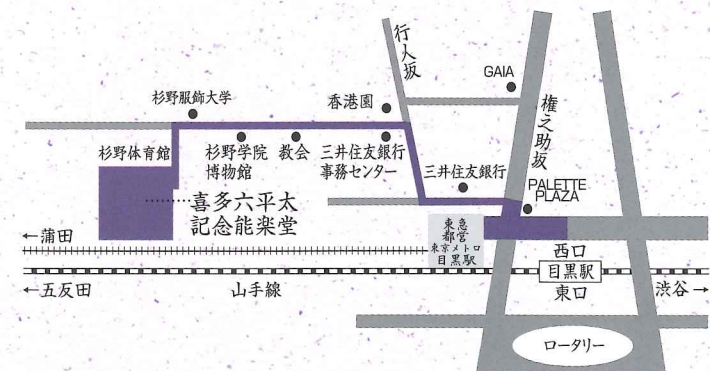
金子 敬一郎 Tel Fax 048(432)6620

E-Mail ————— ticket@jo-hu.net

Web ————— http://jo-hu.net/

十四世喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 東京都品川区上大橋 4-6-9



JR 線、東急目黒線、都営三田線、営団南北線ともに目黒駅下車、徒歩 7 分

※当能楽堂には駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮願います

※許可無き写真撮影・録画・録音等は固くお断りいたします

# 番組

仕舞 東岸居士 金子敬一郎

天鼓 友枝雄人

地謡 佐藤真陽  
友枝真也  
大島輝久  
塩津圭介

子方・千満 栗谷僚太

後シテ・前同人 狩野了一

## 能 三井寺

ワキ・園城寺の住僧 宝生欣哉

大鼓 亀井広忠  
小鼓 鶴澤洋太郎  
笛 松田弘之

ワキ連・従僧 大日方 寛

ワキ連・従僧 森 常太郎

アイ・清水寺門前の者 山本凜太郎

アイ・園城寺の能力 山本則孝

後見 内田安信  
中村邦生

地謡

佐藤 大村 定  
大島輝久 栗谷能夫  
栗谷充雄 友枝昭世  
佐藤寛泰 出雲康雅

## 狂言 栗焼

シテ・太郎冠者 山本泰太郎

アド・主 山本則孝

休憩 二十分

仕舞 谷行 塩津哲生

地謡

栗谷浩之  
金子敬一郎  
友枝雄人  
栗谷充雄

## 能 実朝

後シテ・源実朝の霊 前シテ・老翁

内田成信

ワキ・旅僧 森 常好

アイ・由比ヶ浜の者 山本泰太郎

大鼓 柿原弘和  
小鼓 曾和正博  
太鼓 観世元伯  
笛 一噌隆之

後見 塩津哲生  
狩野了一

地謡

谷友矩 佐々木多門  
友枝真也 友枝雄人  
栗谷浩之 長島茂  
塩津圭介 金子敬一郎

終了予定 午後四時三十分頃

### 三井寺 みいでら

千満の母は清水寺に参籠し、いなくなつた我が子に再び会えるように祈願していると夢のお告げが有ります。清水寺の門前の者が迎えに来て、その霊夢を占い、三井寺(園城寺)に行くように勧めます。(中入)三井寺では、今夜は八月十五日、名月なので住僧たちは講堂の前に出て月見を行います。その中に住職を頼つて来た幼い人も交じっています。寺の能力は住僧に命ぜられて幼い人の慰みに小舞を舞います。そこへ女物狂が来るというのを聞いて能力は呼び入れようと従僧に相談しますが、必要ないと言われますが能力は諦めず独断で女物狂を招き入れる事にします。その物狂は我が子の行方を探ねて、都から三井寺へとやってきた千満の母でした。そして住僧たちが月見をしている場所に入り込んで来て、一緒に湖上の月を眺めます。能力が鐘をつくこと、それを聞いた女は、自分も撞こうといい、住僧が止めると鐘の古事を述べ鐘楼に上がり鐘を撞きます。幼い人が、女の郷里を尋ねるように頼むので、住僧が女に聞くと、清見が関の者と答えます。母と子は互いにそれと分かり、鐘が縁になつて親子が再開が出来た事を喜び合い、連れ立って故郷へと帰ってゆきます。

春の「隅田川」に対して秋の狂女物の代表曲です。名所の月と鐘をモチーフにして、和漢の詩文を引用して閑麗な謡に仕上げられています。物語としての筋は単純ですが、親子対面に至るまでに、三井寺への道行、琵琶湖畔の名所づくし、鐘の段、鐘づくしのクセと盛り沢山の見せ場、聞かせ所が続きます。狂乱を遊興の美に置き換えて表現する能の狂女物の頂点の一つと言える曲です。

### 栗焼 くりやき

主人が栗をもらったので、客にふるまいたい、数に気を付けて焼き上げよと、太郎冠者に言いつけます。太郎冠者は台所で栗を焼き上げるのですが、

皮をむき終えて見ると、あまりに旨そうなのでつい食い過ぎてしまいます。気がつくとも栗を全部食べてしまっていました。困った太郎冠者は主人に「かまどの神」とその公達に栗を進上したと言つて誤魔化しますが……

### 実朝 さねとも

頃は春、東国行脚の都の僧が鎌倉へやってきます。鶴岡八幡宮を拝した後、由比の浦で景色を眺めていると日も暮れようとする海に、船を漕ぎだそうとする老人がいます。不審に思い素性を尋ねますがそれには答えず、この浜に執心のある様子を見せます。僧は昔、源実朝が宋へ渡る為に船を造つたが、あまりに大きな船を造つたので海へ出す事が出来ず、そのままこの浜で朽ち果てた事を思い出します。すると老人はその事を詳しく語り愁嘆の気色を見せます。老人は実朝の亡霊だったので。僧に請われるがまま、老人は実朝が公暁に暗殺された事を語りますが、物語が佳境にさしかかると騒然とした気色を表し、夜嵐・磯の波の音にまぎれて掻き消えます。

里の者に実朝の大船の話聞いた僧は、この浦で夜を過ごし、実朝の霊が現れるのを待つ事にします。やがて月光の元に、在りし日の姿で現れた実朝は、歌人としての意気を表し大海原を背景に舞を舞います。そして自らの和歌を吟じつつ何処とも無く消えてゆきます。

昭和二十五年に十五世喜多実師によって初演された、いわゆる新作能です。主人公である源実朝は鎌倉幕府三代將軍として悲劇の主人公であり、また金槐集を纏め上げた歌人でもあります。これを前場では八島など修羅能の様な無常観。後場では融のような壮麗で、しかし覇気に溢れた場面というように対比として表現されます。

後場の早舞は「大海の舞」と名付けられていて、舞の入り・留・緩急に工夫がされています。